# 彙報

## 第十八回国際アルタイ学者会議

松村　潤

一九六二年に創立されたこの学会は、Permanent International Altaistic Conference の略称 PIAC で知られているが、前回は西ドイツのボンで開催され、東京大学の護雅夫氏が出席されている。今回は、PIAC の Secretary General で会の運営を事実上、一人できりまわしている Denis Sinor 氏の本拠であるインディアナ大学で行われた。インディアナ大学はアメリカ合衆国中西部のインディアナ州の州都インディアナ・ポリスの南五十哩、バスで約二時間ほどのブルーミントンという静かな大学都市にあり、一八二〇年に創立されたというから、アメリカでもっとも古い州立大学の一つであろう。この学会は夏季休暇の間に開かれるのが常であるが、真夏のアメリカ中西部は日中の温度は華氏九十度を越える有様で、キャンパスの緑の木立は砂漠の中のオアシスを思わせるほどであった。会場と宿舎にあてられたメモリアル・ユニオンは一流のホテル並の施設を有する豪華な建物で、参加者は一週間の会期の間、ここで起居を共にしたわけである。

最終のサーキュラーをロンドンで受けとったのが六月十四日であるから、外国の参加者にとっては日程を組むのには大変あわただしかったと思われる。ともかくその指示に従ってブルーミントンに向い、六月二十九日の午後インディアナ大学に到着した。途中、インディアナ・ポリスのグレイハウンドのバスの待合室で、一人の女性から声をかけられ、「PIAC に出席するのか」とたずねられたが、同女史はメリーランドから来た Mary Frances Weidlich で、磯野富士子氏と学生時代を共にした友人とのことであった。同女史もモンゴルの研究家である。メモリアル・ユニオンの入口で登録が行われ、参加費として百ドルを払いこみ、書類を入れた鞄を受けとり、サイナー氏をはじめ、その場に居合せた何人かの人々の挨拶をうけた。その夜は七時半から夕食会がもたれたが、ただ顔合せにとどまり開会式といったような行事はなかった。しかし出席者の多くは、いずれも旧知の人々のようで、久濶を叙する光景があちこちに見られた。私にしてもサイナー、ポッペ、陳捷先、ジャグチッド、フレッチャー、ハイヤ、ノーマンの諸氏は、東洋文庫で、あるいは一九七一年十二月台北で開かれた第四回東アジア・アルタイ学者会議で顔を合わせており、誠になごやかな一晩であった。

翌朝九時より会議が始まり、会長のホフマンの挨拶、つい

でチャイナーの司会で、恒例のコンファレンスに入り、出席者が順次立ち上って最近の業績や自国におけるアルタイ学の近況について報告した。その氏名をあげると次の通りである。

José M. Barral (Universidad Autónoma de Madrid), Gustav Bayerle (Indiana University), Lajos Bese (Hungarian Academy of Sciences, Budapest), John Boyle (University of Manchester), Yuri Bregel (Hebrew University, Jerusalem), Sadettin Buluc (Istanbul University), Chieh-hsien Ch'en (National Chengkung University, Taiwan), Larry V. Clark (Indiana University), Francis Cleaves (Harvard University), Barbara Crocken (Harvard University), Okan Daher (Helsinki), Robert Dankoff (Brandeis University, Waltham, Mass.), Stuart Delorme (Philadelphia), Mitsuo Ebihara (Tokyo), Thomas Ewing (University of Leeds, England), Joseph Fletcher (Harvard University), Thomas Goodrich (University of Indiana, Pennsylvania), Tibor Halasi-Kun (Columbia University), Stephen Halkovic (Indiana University), John G. Hangin (Indiana University), George E. Hibbard (St. Louis), Helmut Hoffmann (Indiana University), C.T. Hsi (Universität Bonn), Pei Huang (Youngstown State University), Paul Hyer (Brigham Young University), Sechin Jagchid (Brigham Young University), Aulis Joki (Helsinki University), Abdulkadir Karahan (Istanbul University), John Krueger (Indiana University), Luc Kwanten (Indiana University), Owen Lattimore (Paris), László Lörincz (University of Budapest), Jun Matsumura (Nihon University), Michael Miller (Indiana University), Roy Andrew Miller (University of Washington, Seattle), Larry Moses (Indiana University), A.K. Narain (University of Wisconsin), Jerry Norman (University of Washington, Seattle), Nicholas Poppe (University of Washington, Seattle), Alo Raun (Indiana University), Morris Rossabi (Case Western Reserve University), Manuel Ruiz (El Colegio de Mexico), Klaus Sagaster (Universität Bonn), Alice Sárközi (University of Budapest), Edmond Schütz (University of Budapest), Henry G. Schwarz (Western Washington State College), Denis Sinor (Indiana University), Mikhail Sofronov (Far East Institute, Moscow), John Street (University of Wisconsin), Robert Suggs (U.S. Office of Education), Ann Sweetser (Harvard University), Edward Tryjarski (Polish Aca-

demy of Sciences, Warsaw), István Vásáry (University of Budapest), Mary F. Weidlich (Takoma Park, Maryland)

第一日は、終日コンフェッションで終り、夕食後バスで郊外にあるサイナーの自宅へ赴き、ここでワインパーティーが行われた。

翌七月一日の午前は当初配られたスケデュールでは、研究発表となっていたが、昨日のコンフェッションの続きがこれにあてられた。二日にわたるコンフェッションのうち、いくつかについて、発言順に紹介すると、ボイルはラシッドエディンの英訳、ポッペは蒙古叙事詩四巻のうち三巻を印刷刊行し、これにつづく第五巻はカルムークに保存されているジャンガルを予定している由、ザガスターは前回の主催者であったボン大学のハイシッヒのメッセージを伝え、ハンギンはインディアナ大学に本部が置かれている Mongolia Society について、シュッツはリゲティからのメッセージを伝えるとともにハンガリーの学界動向を報告、ペイ・ホァン（黄培）は清朝の八旗制度の研究、ノーマンは満英辞典を完成し刊行の準備中、ラシドンドブ（C.T. Hsi）は Arad-injarghu-yinbičig の翻訳、ソフロノフはソビエトの西夏研究の紹介、ロイ・ミラーはインディアナに来る前、京都において村山七郎と共同研究を行っていた由、クリーブスは旧満洲檔内の蒙文について（なお、同氏はアメリカ国外は勿論、国内の学会にもほとんど出席せず、PIAC もはじめてとのことである）、ハラシクンはキプチャクのハンガリーへの影響、ラティモアはテレビの Document of Mongolia 作成および中国を訪問した際のエピソードをまじえて報告した。午後は研究発表に入り、

Sadettin Buluc, "Über einige sprachliche Besonderheiten der anatolischen Mundarten."

Robert Dankoff, "Middle Turkic Vulgarisms."

Abdulkadir Karahan, "An Outline of Cultural Relations between Turkey, Iran, and Pakistan."

Owen Lattimore, Loyalty and Honor: The Case of Temüjin-Chingis khan and Jamukha Gör khan."

以上の四つの発表がなされた。なおあらかじめ配付されたリストにはバラルの "Terms on Human Emotions in a Spanish-Turkish Vocabulary in 1626" があったが発表はなかった。今回のテーマは "Human emotions" (e.g. Honor, love, loyalty, solidarity, fear, and courage) となっており、これにそったものが中心となるが、ラティモアの発表は磯野富士子氏との共同研究であって、元朝秘史にもとづくが、発表が終ると早速ジャグチッドから多くの疑義が出され、またポッペは元朝秘史の史料としての性格について岡田英弘の説

を紹介した。

二日目の夕食は、ピクニックディナーということで、バスで近くの Beechwood Heights というところへ出かけ、バーベキューが行われた。夕方になるとさすがに涼しく、湖畔には螢がとびかうなかで、各国からの人々の交歓が行われた。

第三日七月二日の午前中は、Session on Teaching and Teaching Materials ということで、専門の研究とはあまり関係のない会合がもたれた。

冒頭サイナーが、自分は研究で大学から俸給を貰っているわけでなく、教えることによって俸給を貰っているのだからという説明があったが、これは今回の開催にあたって文部省や大学当局から補助を受けるために、こうした題目を設けなければならなかったようである。なお、このプロジェクトに関連して、インディアナ大学のアジア研究所から Teaching Aids for the Study of Inner Asia のシリーズの刊行が企画され、現在まで、

No. 1. Denis Sinor, What is Inner Asia?

No. 2. Turrell V. Wylie, Tibet's Role in Inner Asia.

の二冊が、アジア研究を専門としていない大学や高校の教師を対象に出されており、出席者に配付された。午後は、

Chieh-hsien Ch'en, "Emotional Insights into the Personality of a Manchu Emperor——Based on Emperor Yung-cheng's Vermilion Endorsements."

Paul Hyer, "Some Observations on Mongolian Regional Stereotypes."

Sechin Jagchid, "Traditional Mongolian Attitudes and Values as seen in the *Secret History of the Mongols* and the *Altan tobči*.

の三氏の発表があったが、陳捷先は雍正硃批諭旨にもとづいて清朝の皇帝の心情にふれたものである。ハイヤはモンゴル人の間において、「ハルハは愚鈍、チャハルは気が荒い、ハラチンは狡猾」といったイメージが生れてくる所以を種々の面から考察すると共に、日本人、ロシア人、中国人、アメリカ人に対して一般のモンゴル人がいだいているイメージにもふれたが、該当者がいずれも出席しており、苦笑せざるを得なかった。ジャグチッドは元朝秘史とアルタントプチに現われているモンゴル人の理想像や伝統的な行動様式と価値観をモンゴル人の目から述べたもので興味をそそった。

夜は大学当局の招待があり、前もってサイナー氏から服装を整えて出席してほしいとの要請もあったが、大学側からは副学長がホストとして出席しており、なかなか豪華な宴会が催された。

四日目の七月三日の午前には、次の五氏の発表が行われた。

Edmond Schütz, "Turkic *tart*-Hungarian *tart*."

Edward Tryjarski, "Interjections in some languages of Western Turkic (Codex Cumanicus, Arabo-Kipchak, Armeno-Kipchak, Karaim, Kazan-Tatar)."
László Lörincz, "Bemerkungen zur "Geschichte der mongolischen Literatur" von Walther Heissig."
Aulis Joki, "Ein paar Bemerkungen über die Begriffe "Ehre und Liebe" im Altaischen und Uralischen."
Alice Sárközi, "Love and friendship in the *Secret History of the Mongols*.

午後は Business meeting が行われ、次回の開催地については**ヨキ**氏の申出を拍手をもってうけいれ、ヘルシンキで開くことが決定した。なお会期は例年よりは少し早く六月八日から十二日までとなっている。ついで一九七五年度の PIAC Medal の銓衡が行われ、銓衡委員から候補としてあげられた Karl Jahn と服部四郎の両氏について、過去二回以上この学会に出席した会員の投票が行われ、ヤーン氏の受賞が決定した。なお前回はオーエン・ラティモア氏が受賞している。ついで来年の銓衡委員四名が投票によって選ばれた。午後は郊外にあるインディアナ州でもっとも大きい湖であるモンロー湖での Boating party に出かけたが、三艘のモーター・ボートに分乗して、水泳を楽しみ、対岸でピクニックディナーを催し半日の行楽を楽しんだ。

五日目の七月四日はアメリカの独立記念日にあたったが、午前中は残されていた次の五氏の研究発表が行われた。

Istvan Vásáry, "The Golden Horde term *daruga* and its survival in Russia."
Lajos Bese, "Was Köde Aral an island?"
Alo Raun, "Some Remarks Concerning Affective (Emotional) Meaning."
Larry Clark, "Turkic *öč*-Mongol *ös*, hatred, vengeance."
Denis Sinor, "Lament on the death of a qatun."

午後には Teaching and Teaching Materials についての第二回目のセッションが予定されていたが、これは中止し自由行動となったので、ジャグチッド、陳捷先の両氏と共に、インディアナ大学の East Asian Languages & Literatures 部門の主任である Y.J. Chih (郅玉汝) 教授の案内で図書館を見学した。夕食は郊外の Fireside Inn というレストランで摂り、そのあと大学のスタディアムで行われる独立記念日のお祭りを見学に出かけたが、席に着くと場内放送が我々を紹介し拍手で迎えられた。バトンガール、騎馬行列、そして花火がつぎつぎと打上げられ夜遅くまで続いたが、恐らく町中の人々が、ここに集まって来ていたのではないかと思われる。

最終日の七月五日の午前はサイナー夫人によって、サイナ

ー氏の撮影した第二回からの PIAC の八粍映画が映写されたが、知人が出てくる度に拍手があがった。日本人では池上二良、山田信夫、岡田英弘、西田竜雄の諸氏の顔も見られた。ついでフレッチャー氏の提案により、今回の会議の開催についての関係者への感謝の決議がなされ、幕を閉じたのであった。

## オスマン帝国社会経済史研究における遺産目録文書の重要性

永田雄三

筆者は一昨年の秋から二度にわたり、のべ一年程のあいだトルコ共和国に滞在し、一八・一九世紀のトルコおよびバルカン諸国史に関する史料を収集する機会をえた。(1) それらの史料の中には、一八世紀以後、この地方に勃興した名望家（アーヤーン）たちの遺産目録（Tereke Defteri あるいは Muhallefat Defteri）が多数含まれているが、これは、これまで等閑視されてきた一八・一九世紀オスマン帝国史の社会・経済および地方文化などの諸側面を明らかにするうえに重要な基礎資料を提供すると思われるので、以下にこの資料群の所在場所・性格・内容などについて若干の所感を記しておきたい。

### （一）

オスマン語は、アナトリアのトルコ語を基礎とし、これにアラビア語とペルシャ語の諸要素をふんだんにとり入れた、オスマン朝の公用語であるが、これはオスマン王家を中心とした一部の支配層の言語ではあっても、オスマン帝国支配下のバルカン諸民族やアラブ民族にとってはまったくの外国語であるばかりではなく、トルコ人の大多数にとってもまた、なじみにくいものであった。オスマン語のそうした特殊性は、オスマン語による史料の性格をも基本的に特徴づけている。すなわち、オスマン語史料においては、ごく少数の例外をのぞいては、地誌、農書、家伝、地方史、地方名士録などの、いわゆる地方文書が欠落しているばかりでなく、史書（勅撰史・年代記など）、宗教書、文学書、法令集などの史料の中から、当時の人びとの社会生活、経済的営み、庶民文化などをうかがい知ることはきわめて困難である。したがって、社会・経済史や地方史研究のための典拠としては、主として、㈠総理府古文書局（イスタンブル）、㈡ワクフ総局（アンカラ）、㈢トプカプ故宮博物館古文書部（イスタンブル）、㈣地券および地籍簿総局（アンカラ）などに保存されている古文書と、トルコにかぎらず、バルカンおよびアラブ諸国にも広く残存するシャリーア法廷記録（Ser'i Mahkeme Sicill Defteri）